

1 学校教育目標 心豊かにたくましく生きる生徒の育成 ～自ら考え、適切に判断し行動する 中学校生活を通して～	2 本年度の重点目標 ① 基礎・基本の確実な習得と活学力の伸長 ② 豊かな心と社会性の育成 ③ 基本的な生活習慣の確立と健やかな体力の向上 ④ 教職員の業務改善や長時間労働の解消に向けた環境づくり
--	---

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価

①基礎・基本の確実な習得と活学力の伸長

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	1. 校内研究への取組による指導方法の改善 2. 意欲的かつ望ましい学習態度・学習規律の育成 3. 家庭学習・補充学習の充実 4. 読書活動の充実	1. 指導法の工夫・改善を図り、生徒がわかる喜びを実感できる授業を構築する。 2. 習得・活用・探究を図る学習活動や、思考・判断・表現力の育成をめざした学習活動の充実を図る。 3. 学習意欲を喚起し基礎・基本の徹底指導と学び方を習得させる。 4. 読書習慣を身につけさせ、読書に親しむ態度の育成を図る。	・全職員による公開授業と授業研究会の実施。TT授業等の研究。各種研修会への積極的な参加。 ・学習状況調査等を活用した学習指導の展開。 ・学び合い活動に言語活動を組み込んだ指導法の研究。 ・学習規範の指導徹底。授業のわらいや流れを明確にした授業の確立。 ・年間を通じた朝読書の実施。 ・生徒会図書部との連携による図書館利用の充実。 ・「すくすくテスト」や「学習クラスマッチ」、佐賀大学と連携した長期休業中の補充学習等の推進。	A	・全職員が1回以上の公開授業を行い学び合い活動を核とした指導法の改善に取り組んだ。 ・学習規律を徹底して落ち着いた学習環境を作り、習熟度別やTTによる指導により、活学力と基礎基本を大切にしながら取り組んだ。 ・生徒会活動とタイアップした朝読書や学習クラスマッチで、学習環境の向上に努めて効果を上げた。	・県学習状況調査、NRT、Q-U検査等の調査結果を十分に分析して、日々の教育に積極的に生かす取組がさらに必要である。そのため職員研修も積極的に進めていく。 ・家庭学習時間が1時間以内という生徒の割合が昨年度より減少してきたので、学習習慣を身につけさせるための家庭との連携や、課題の工夫を継続して行っていく。
教育活動	◎教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施	1. ICT機器を効果的に活用した授業づくりの推進	1. 電子黒板の操作の習得を図る。 2. ICT機器を活用した授業の進め方について研究を深める。また、研修体制の強化を進める。 3. ICT機器を活用する教材の開発及び環境整備を推進する。	・ICT活用教育のリーダーを中心に、ICT機器を活用した授業を各教科で研究・実践。 ・ICT活用教育の研修会を実施する。 ・ICT機器を活用する教材の開発を全教科で推進し、活用できる教材のストックの増加。	A	・全職員が電子黒板と電子教科書の操作に慣れ、ICTを活用した授業を行っている。 ・パソコン室、タブレット型PCの利用、書画カメラ(ぼけけんくん)の活用についても、日常的に行われている。ただし、「分かりやすい授業を展開しているか。」の間には、まだ研修の余地があると考えられる。	・年度当初に本校のICT機器の保有状況や活用方法を全職員で確認し、それぞれのもつノウハウを共有する機会をもつ。 ・ICT機器を活用した教材の開発についてもICT支援員の協力を得て作成し、授業の質を高める。

②豊かな心と社会性の育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	1. 豊かな心を育む道徳の授業の充実 2. 基本的な生活習慣の定着 3. お互いを尊重しあえる人間関係づくりの推進 4. 生徒会活動の活性化	1. 道徳的価値に基づいた生き方の自覚を促す授業の充実を図り、正しい判断・実践力の育成をめざす。 2. 「あいさつ・無言清掃・時間を守る」を中心として、基本的な生活習慣の定着を図る。 3. コミュニケーション能力や人間関係構築能力を高め、社会適応能力を育成する。 4. 生徒の自主性と創意を生かした生徒会活動を展開する。	・道徳の授業の研鑽、教科指導・体験活動等、全教育領域において、心の教育の充実を図る。 ・日常におけるあいさつの励行、無言清掃と集会における無言入退場。 ・ノーチャイム運動の充実と学年の連携による遅刻をなくす指導の強化。 ・Q-U検査を活用した、ソーシャルスキル教育の計画的な展開。 ・複数担任制による生徒観察・指導の強化充実。 ・日々の教育相談活動や週末アンケート等による生徒の実態把握、人権尊重を大切に授業や行事の実践。 ・生徒一人一人が活躍できる学校行事や体験活動の充実。 ・高いリーダー性を持った生徒会役員との育成と1、2年生のリーダー育成。	A	・「あいさつ」「無言清掃」「時間を守る」ができるようになってきていると答えた生徒が98.1%となり、定着してきた。 ・複数担任制による日々の観察や木曜アンケートにより、生徒同士の人間関係を把握し、早期の指導を行うことができた。 ・遅刻が少なく基本的な生活習慣が身につけている生徒が多い状態である。 ・ノーチャイムや無言清掃の取組を生徒のリーダーシップを生かしながら推進できた。	・生徒の落ち着いた状態に安心をすると、問題の解決を十分に分析して、日々の教育に積極的に生かす取組がさらに必要である。そのため職員研修も積極的に進めていく。 ・道徳の授業については、教科化に伴って、校内研究を進めていく。生徒の心を揺さぶる実践を進め、道徳教育推進教師を中心に進めていく必要がある。 ・生徒会活動では、生徒自ら企画・運営を行い、様々な取組を行うことができるように、お互いを尊重しあえる人間関係を見直し、各委員会ごとに充実させることができるように指導を行っていききたい。
教育活動	●いじめ問題への対応	1. 人権・同和教育の推進を含めたいじめ防止のための教育実践 2. いじめの早期発見・早期対応に向けた取組	1. 道徳、特別活動をはじめとした教育活動において、いじめ防止のための心の教育につとめる。 2. 人権を尊重し、正しい差別のない豊かな社会を築く人間の育成をめざす。 3. いじめの早期発見を徹底するため、生徒理解・指導と教育相談体制のさらなる充実を図る。 4. いじめの早期対応を徹底するための、対応力・指導力と教育相談体制のさらなる充実を図る。	・道徳や特別活動において計画的に「いじめ防止」に関する題材・活動を取り入れる。 ・「週末アンケート」の実施方法や結果の活用方法について絶えず検討・修正を加える。 ・教育相談部を中心に各学年で協力するとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携を密にする。 ・インターネット上のいじめに対応するために情報モラルの教育を計画的に行い、いじめ防止に努める。	A	・95.1%の生徒が「お互いを大切にしようとする人間関係づくりを行っている」と答え、97.4%の生徒が「いじめを生んではいけない」という思いで生活している」と答えている。 ・いじめを生まない学級づくりのために、規律づくりと絆づくりで各学年で取り組んだ。 ・インターネットの適切な利用の仕方について外部講師を招いて研修を行い、ネット上の中傷などを防止した。	・普通学級に在籍する生徒にも、特別な支援が必要な生徒が存在する。そのような生徒が適切な対象にならないように、お互いに認め合うような風土づくりを今後も推進したい。 ・木曜アンケートがマンネリ化しないように、担任が常に危機感を持って対応し、報告・連絡・相談を徹底して組織としての防止体制を構築したい。

③基本的な生活習慣の確立と健やかな体力の向上

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	1. 部活動指導による人間形成 2. 健康管理意識の向上 3. 安全教育の徹底と危機回避能力の育成	1. 心と体を育てる部活動の経営に努める。 2. 自らの健康を考えた毎日の生活を送る態度と実践力を育てる。 3. 学校内外において安全な生活を送ることができるよう危機回避能力を育てるとともに、生徒が安全に通うことができる環境作りを努める。	・全員部活動の実施、及び、活動を通じた技術や体力の向上、忍耐力・自主性・社会性・協調性・公平性等の育成。 ・定期健康診断の実施と事後措置及び健康保持推進に向けた指導、健康に対する情報の伝達。 ・食生活を含め望ましい生活習慣の確立。 ・交通安全や防犯教室、避難訓練の実施、各施設の見直し及び補修。 ・学校内外の危険箇所マップの活用、緊急メールによる情報の速やかな発信。 ・立ち番指導による生徒の登下校時の安全確保。	A	・部活動は学校教育活動の一環として行われている。部活動を通して、生徒の健康な成長を促すことが、目標の一つである。昨年度と数値は変わらなかった。部活動によって活動の範囲や強度の違いはあっても当然であるが、部活動で培った基本的な事は、形や伝え方が違っても同じである。今年度から部活動の在り方が変わった点がある中で年度初めの部活動顧問者会等で、職員に部活動の目的について共通理解を図り、全職員が同じスタンスで指導を行いたい。	・平日の活動時間2時間、休業日の活動時間3時間土日を含む週2日以上以上の休業日を設けることを各人がする意識を徹底する。限られた時間で、いかに成果を上げるかを考え活動した。 ・来年度、学校安全総合支援事業の指定を受けるので、安全教育に一層の力を注いでいく。

④教職員の業務改善や長時間労働の解消に向けた環境づくり

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	1. 学年・学級経営の充実 2. 業務改善マニュアル作成と徹底 3. 衛生管理の改善充実	1. 学年の協働意識を高め、職務の効率化と生徒への指導の充実を図る。 2. 「仕事にやりがいを感じている。」と答える職員を90%以上にする。 3. 多忙感解消で、時間外勤務時間を前年同月より10%以上減らす。	・学年会で、情報交換や協議を行い、共通理解に基づき複数担任制を生かした協働を推進する。 ・各種業務項目のマニュアル化で共通理解を進め、業務の無駄をなくす。 ・タイムマネジメントを行うと共に、定時退勤日の確実な実施を行う。	A	・業務時間を減らすには、一人一人の意識の改革が必要だと感じる。仕事の効率を上げるために、個人として何が出来るか、組織として何が出来るかを全員が考え、実施していく必要がある。 ・チーム上峰として、出したアイデアを、積極的に共有して、取り組んでいきたい。	・業務時間を減らす必要性を各人が認識し、個人として何が出来るか、組織として何が出来るかを具体的に示し、年間を通しての超過勤務時間平均70時間を上回らないように意識する。
学校運営	○特別支援教育	1. 特別支援教育体制強化 2. 個別の支援の充実と専門機関等との連携強化	1. 特別支援教育について理解を深め、全職員による指導体制の強化を図る。 2. 特別支援学級の生徒だけでなく、普通学級に在籍する特に支援を要する生徒の指導の充実を図る。 3. 特に支援を要する生徒や不登校生への専門機関との連携による指導支援の強化を図る。	・特別支援教育についての研修会への参加と校内研修の充実。 ・個別の支援計画の作成及び効果的な活用、指導法の改善と全職員による協力体制の確立。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、特別支援教育支援員の有効な活用。	A	・夏季休業中に外部講師を招いて、特別支援教育についての職員研修を行った。 ・専門家による巡回相談や小学校との連絡、スクールカウンセラーを交えたケース会議などを複数回もち、個々の生徒への対応について共通理解をはかった。 ・普通学級における支援を要する生徒が増えたので、組織的に対応できるように心がける。	・不登校生徒についても特別に支援が必要であるという考えで、個別の支援を行うことが大切である。スクールソーシャルワーカーのさらなる効果的な活用を考えていきたい。 ・特別支援学級に関わる職員だけでなく、全職員が個々の生徒の成長について共通理解を図りたい。
学校運営	○開かれた学校づくり	1. 学校公開と情報の発信 2. 地域と連携した学習の推進	1. 学校の情報を発信し学校の説明責任を果たすとともに家庭や地域の声を学校経営に反映させ、地域と一体となった教育をめざす。 2. キャリアデザインにつながる体験活動や地域の伝統芸能に触れる活動などを通して、地域と連携した教育活動を充実させる。	・学校だより・上中らら(学校行事紹介写真)の地域回覧、ホームページ更新、授業参観・オープンスクールやPTA活動活性化のための企画力向上。 ・学校評価の効果的な活用、保護者との日常的な情報交換の機会拡充。 ・地域や保護者の協力による職場体験の実施や地域の伝統芸能を取り入れた総合的な学習の実施。	A	・学校による情報発信に関わって、93.6%の保護者が「子どもの様子を伝えたり家庭との連携を図ったり、努力をしている」と感じている。 ・約96.6%の保護者が「学校は地域と連携して教育活動を行っている」と認識している。	・学校からのたよりを保護者にきちんと渡している生徒が約85.7%と昨年度より上昇した。来年度も、まちこみメールを活用するなど、家庭と連絡を取りながら指導をしたい。 ・オープンスクールへの参加者が伸び悩んでいるので、PTAと連携してより効果的な公開について工夫したい。
学校運営	○小中連携	1. 小中の学力面・生徒指導面の連携 2. 中1ギャップや不登校の解消	1. 9年間育てる視点に立ち、小中のつながりを大切に学力向上や生徒指導の充実を図る。 2. 小中の接続をスムーズにし、中1ギャップや不登校の解消に努める。	・計画的な小中連携活動(子どもとの交流、教職員の交流、子どもと教職員の交流)の促進。 ・学力向上に向け、年間指導計画や教科の指導内容等を考慮した交流会の実施。	B	・夏休みの体験入学と11月の入学説明会、小学校運動会へのボランティア参加など連携を推進した。 ・小中合同研修会や連携協議会の設定を行い、昨年より教科や生活指導での連携を進めた。 ・相互の授業参観は行うことができたが、出前授業の実践ができなかった。	・小中連携には、教師の交流、生徒の交流がともに必要なので、さらに工夫して場を設定したい。 ・校内研究で共通の柱を立てて連携しているが、職員の意識に差があるので、小中連携の利点を共通理解し、小中職員が9力年で子どもを育てるという意識をもてるようにしたい。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

・保護者、地域の方々、学校評議員から、本校の教育活動について肯定的な意見が多く寄せられた。本校の教育活動について、年々クオリティが上がってきていると概ね良い評価をいただいている。校内研究を軸にした指導方法の工夫改善など、現在取り組んでいることが一定の成果を上げていると自負しつつも、これに安心することなく、確かな学力を目指した指導方法の工夫改善を重ね、豊かな心と望ましい人間関係づくりのために、熱意と使命感を持って教育活動に取り組むたい。
B評価となった、「小中連携」の項目については、①教師の連携、②児童生徒の連携、③行事での連携、④教科での連携を柱にして、出前授業の実施も含め9力年で子どもを育てる意識を高め小学校とともに力を注いでいきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目